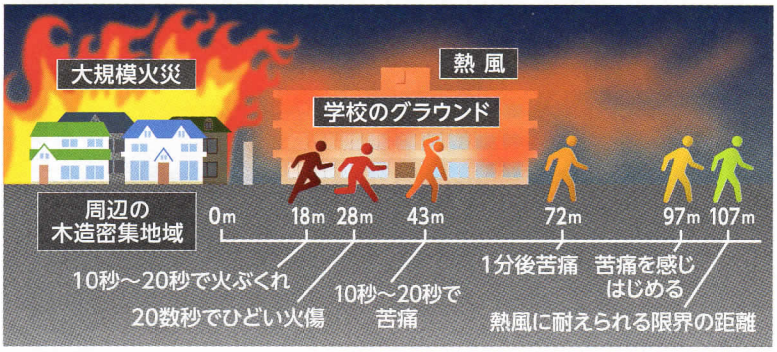
心得その❸ 広い場所に避難する

大規模火災から避難する場所は「避難所ではなく広域避難場所」

火災からの距離と人体への危険性のイメージ（風速6mの気象条件の例）



避難所が安全な場所とは限らない

火災を消すことができず、次々と家に延焼してしまった場合、どこへ避難しますか？ほとんどの人が、「避難所（小中学校）へ駆け込む」と答えるのではないでしょうか。

しかし、時と場合によって、**避難所に逃げることが命を危険にさらす場合があるのです。**大規模火災に発展し、木造密集地域内の避難所に火災が迫った場合、図のように学校のグラウンドに避難していても**火災の熱風などに襲われ、命の危険にさらされる場合があるのです。**

熱の届かない広い場所へ早めの避難

大規模火災から避難するには、**火災の熱が届かない広い場所**でなくてはなりません。

市では、火災から逃げる場所として**『広域避難場所』**を指定しています。また、家の近くに広域避難場所がない場合は、**木造密集地域から離れた広い場所**へ逃げましょう。火災に囲まれて逃げ場を失わないように、火災が迫ってくる前に、早めに避難しましょう。

災害リスクがなくなってから避難所へ

地域で火災が起きているうちは広域避難場所へ行き、**火災の危険性がなくなってから避難所で避難生活を送りましょう。**

避難先の選択と順序が生死を分ける重要なカギとなります。避難は命を守る最後の砦です。事前に避難先と避難ルートを確認しましょう。

震災時の避難先

❶広域避難場所

大規模火災の熱から避難する場所

木造密集地域から離れた広い場所や空き地、ビル群なども広域避難場所の代わりになります

火災の危険性がなくなってから避難所へ

❷避難所

災害の危険性がなくなった後に避難生活を送る場所

避難先は1か所ではありません！

地震火災から身を守るには広域避難場所が有効ですが、時と場合によってはその場所が危険になることもあります。たとえば海や川のそばで揺れを感じた時は、津波から身を守るため、高台に避難することが最優先となります。また、最初は安全だった場所も、状況の変化で次の避難場所に移らなければならないこともあります。

災害に「絶対」はありません。刻々と変わる状況を見ながら正しい情報を収集して判断し、安全な場所へ逃げましょう。

火災から避難するには

対策1　あわてず正しく情報を収集して、適切な避難行動を

対策2　大規模火災の場合の避難先は、広域避難場所か、火災の熱が届かない広い場所へ。事前に避難先と避難ルートを確認しましょう